

## 常念岳

若かった時に登っておけばよかったと、残念に思っている山がいくつもある。

鳥海山とか甲斐駒ヶ岳、屋久島などがそれだ。

鳥海山は、何と言っても思いっきり裾野を長く曳いて超然として  
いる姿が良い。甲斐駒は、中央線の車窓から、初めて見上げた時の  
魁偉な山容が忘れられない。最近クルマで高速道路を走り過ぎる  
時に見るだけなので、最初、足元近くを走る中央線の電車の窓から  
見上げた時の感動はない。里から近いのに恐ろしく高く、険しく見  
えた。

独り洋上にあって二九〇〇米の高度を誇る屋久島にも、昔から敬  
意をもって来た。ゲタ履き一切無しの実力一本、太平洋の水際から  
モロにその高さというのは、いくら山高きが故に尊からずとはいう  
ものの、逆に十分気になる。交通不便な所と思い込んで来たけれど、  
本気で行く気なら飛行機という手もあったわけだ。

ただ、縄文杉を訪ねる人が増えてそのあたりの自然環境の破壊が  
心配だという報道を読むと、用もないのに遊びに出かけるのは遠慮

すべきかもという気もしていた。

実際、私が山登りを楽しんだのは昭和三〇年代半ばの数年間、それも夏山だけであったが、夏のシーズン盛りの頃、初めて立山に登った時の、頂上あたりの登山客の混雑とゴミの山には驚いた。二度と立山頂上には来たくないと思った。

その後、夏の富士山の登山路の行列の写真を見て現場の状況を想像し、やっぱり富士も眺めるのが一番、間違っても登ろうなどとは思いもしないで、この歳になった。もともと、富士も立山も夏山の話であって、雪と氷の厳冬期の山々は、私ごとき素人の云々出来る世界ではない。

新幹線で西に向かう時、三島あたりではいつも、右側の窓いっぱい富士を期待する。大抵は胸から上は雲の中で、大きな裾野しかみえないことが多いが、たまに快晴で頂上までくっきり見えることがあると、八合あたりから上の、予想外に急な角度で突き上げる稜線に感嘆させられる。眼を離すのが惜しくて、日本坂のトンネルに入るまで、右後ろに首を捻じ曲げながら眺め入る。

富士山は別格としても、眺める山としての立山も立派である。特に冬、積雪期の立山連峰を日本海の方から撮った写真はよく見るが、

残念ながら実地に見たことは無いので、それで想像するしかないけれど、富山平野の遙か上空に浮かぶ連峰は、莊嚴としか言いようがない。

また、安曇野から見る常念岳も素晴らしい。

初めてその端正なピラミッド型の山容を仰いだのは、先輩に連れられて北鎌尾根から槍ヶ岳を登った時だった。それまで信州の山を知らなかったし、安曇野も初めてであった。

真夏のこと、常念山系には雪は無く、盆地の暑気に蒸されて輪郭がぼやけ、後に見ることになった積雪期の厳しい顔つきの山々ではなかった。

初対面の私には、ここに立ち並ぶ常念岳、蝶ヶ岳、大滝山などの面々を区別することは出来なかったけれど、これらの山々が単に槍、穂高の前山という感じではなくて、安曇野に聳え立つ壮大な壁に見えた。

瀬戸内海に面する岡山で育って、高い山は伯耆大山しか知らなかった私は、独特の信州の風土を造り上げた諸峰たちの風貌に魅され、一度は登って見ようと思い込んだ。

友人と同じで、山との出会いにも縁が必要らしく、憧れた山に首

尾よく登れたこともあるけれど、殆どの山々とは無縁に終わった。

常念岳に初めて登ったのは一九八三年、四十七歳の時。

短い信州彷徨で記憶していることは殆ど断片的だが、幸いこの山行だけは、書いた記録が残っている。

記録を辿ってもう一度、四十七歳の山行を楽しみたい。



去年、一九八二年の夏、いよいよ常念岳に登ろうと思い至った。

高校一年の長男と中学二年の次男を連れて、豊科の旅館に一泊、翌朝一の沢林道のダム工事現場までタクシーを飛ばし、さてと歩き始めた途端に、次男の晶彦が喘息の発作を起こした。長男の岳彦には小児喘息があつて中学卒業頃まで親子ともども苦しんだけれど、最近身体が大きくなるとともに発作は起きなくなっていた。晶彦も二歳近くまで歩けず、長じて走るといつもビリで、ロクに運動の出来ない虚弱児ではあつたが、しかし喘息の発作は知らないで来た。

自宅の裏山の太夫ハイキングコースから始めて、湘南平、大野山、

西丹沢の畦ガ丸と連れて歩いて、さて今回常念岳というわけだったが、半日で常念乗越までの一二〇〇米を登る予定への不安と、朝の冷気が心因性の呼吸困難を引き起こしたらしい。

松本まで引き返したらケロリと治ってしまった。せめて信州の真ん中から見える周辺の山々を見せてやろうと、バスで美ヶ原に登ったが、猛烈な夕立に襲われて終点で立ち往生、何にも見ないで鎌倉に帰ってきた。

今年は捲土重来、一週間の夏休みのうち四日間を常念岳に捧げることにした。一年経ったけれど晶彦は、いまひとつ自信が持てなくて今回は残留、岳彦だけを連れて行く。山登りなどはまったく意に介さない我が家の女性連、かみさん長女次女たち三人は、佐久のおばあちゃん宅に置いておくしかない。

一九八三年八月十八日

鎌倉 — 新宿 — 松本 — 豊科

発生後十日以上も長生きし、迷走し続けた台風5号のために一家の予定は狂い通しであった。十三日から佐久の祖母のところへ閉じ込められていた岳彦は、昨夜やっと動き始めた信越線で帰ってきた。

今朝も中央線は不通だけれど、雲行きからして午後は動き始めると予想して新宿駅まで行って見る。果たして十五時三〇分、三〇分遅れで「あずさ十五号」が動き出す。西に向かう程天候回復、途中徐行を繰り返して十九時松本着。大糸線に乗り換えて豊科まで行く。一杯に開いた窓から電車の燈火を慕ってウンカの大群飛来、車内を乱舞する。

豊科駅前の市川旅館に泊まる。去年は右隣の宿だった。どちらも小さな商人宿。もう夕食は終わりというので、隣の食堂で食べる。

一九八三年八月十九日

豊科 ― 一の沢 ― 常念乗越 ― 常念小屋

七時半起床。快晴。宿の水道の水が冷たい。宿料二人で九千円也。昼飯に握り飯の弁当を依頼。豊科駅前から一の沢のダム工事現場までタクシーで約三〇分。途中にあるゴルフ場までは素晴らしい路、そこから上流は恐るべき岩石だらけの悪路。今度の台風の豪雨は山梨県が中心で、このあたりは大した被害はなかったという。

人の気配の全くない飯場の、入り口にあるポストに入山届を記入して入れ、ザックを担いで歩き始めたのが八時半。谷を横断して遥

かに高く頭上に張られたケーブルを、建設資材を運ぶ滑車がカラカラと動いて行く。谷底に工事の形跡はあるが人影は無い。鳥のさえずりも聞こえない。常念岳なんて自分独りが想いを込めているだけで所詮二流の山だし、コースもひねっているので、夏山の最盛期というのに登山者の姿は見当たらない。でも、これがまたうれしい。

約二〇分で工用の道路は終わる。路は大きな沢の右側の尾根に取りついたり、また河原に降りたりしながら、赤や黄色のペンキ塗りの標識を頼りに次第に登る。谷の水量は豊富。途中ブナの森の中に、何かほの暗くて気になる雰囲気の草地があつて、立ったまま朽ちかけた小さな鳥居がある。「トチの山の神」がこれかと思う。

陽が高くなつた頃「最後の水場」の標識を見て昼食とする。小学六年の男児を連れた同年輩の男、先に在って同じく弁当を使っている。旅館の握り飯は大きな丸い団子で、それをすっかり海苔でくるんであるので真っ黒い砲丸のようだ。

持ってきた新調のガスボンベを、折角だから使おうというので湯を沸かして味噌汁を作ってみる。好調。

最後の水場から突然急登になって森林帯を抜ける。三〇分で花崗岩の碎石に覆われた広い鞍部に出る。常念乗越であろう、十三時。

少しガスがかかっているが岩が明るくて気持ちが良い。右から横通岳からの道がハイマツの間をジグザグに降りてくる。左は常念岳の大斜面、上部はガスに隠れている。

だらだらと一の俣谷に降りかけると赤いトタン屋根の常念小屋がある。小屋主山田利一。土産物のぶら下がった帳場の中にあつて珈琲など淹れている。あたりに都会の芳香が漂う。昼さがりの山小屋には他に人影もなく閑散として、どこかで小さくラジオが高校野球の実況をやっている。

指示に従って二階の十六人部屋二十三号に、荷物を運び込むと既に先客があるらしく窓辺にザックがひとつ。しかし夕方までには相客が次第に増えて総勢七人になる。そのうち二人は昼飯の時の親子、上尾市から来たという。他の三人はみんな単独で、燕岳から南下して来たとのこと。

西向きの窓から下に一の俣谷が見えている。遙か下の谷が尽きるあたりに、槍見河原あたりであろうか小さく梓川が光っている。槍・穂高の山稜は全て雲の中。日の暮れるまで時間があるので横通岳まで登山靴でゴトゴト散歩に行く。山頂からはすぐそこに大天井岳らしいが見えるだけで、あとは全て雲の中。六時過ぎ夕食。百人ほ

どの客が一階の広間に集められて一斉に食べる。直径5センチ、厚さ1センチのハンバーグ、スパゲティ、味噌汁。皿や鉢が全て本格的な陶磁器である。山小屋への荷揚げがボツカからヘリコプターになって、目覚ましく変わったのは多分食器ではないだろうかと思う。

部屋に帰って暗い電灯の下で所在なく地図を眺めていると、偵察に出ていた岳彦が「喫茶室みたいなのがあるよ」と呼びに来る。

なるほど中二階ともいふべきところに、小さな教室ぐらいの広間がある。白木のテーブルや椅子を並べた立派な部屋だ。女性が二人話し込んでいるだけで他に人影はない。岳彦と並んで二人座り込んで、足元の暮れなずむ一の俣谷を眺める。山小屋でこんなゆったりした時が持てるのなら四八〇〇円の宿賃は安いと、すこぶる詩的な場所で詩的でないことを考える。

八時、自家発電の音が止まって電灯が消える。隣の布団の男は京都で板前をやっているという。板前氏の語るところに寄れば、アルプス銀座の山小屋を順に泊まってみると、燕山荘、常念小屋と南下するにつれて施設が粗末になって、蝶ヶ岳ヒュッテに至っては旧態依然、水だって買わなくちゃならないのだからと。

不眠。原因は明らかに音だ。うとうとすると誰かの齒軋りとか、

遠くの板の間で忍びやかな足音がする。それが聴覚を刺激して醒める。それが度重なると頭のシンが興奮してもう駄目だ。二時頃まで輾転反側、醒めていた。

一九八三年八月二〇日

常念乗越 — 常念岳 — 蝶ヶ岳 — 蝶ヶ岳小屋

四時半、九州から来た単独行が起き出して出発して行く。大天井岳を経て中房温泉に降りるとい話だった。

また全員一斉の朝食。味噌汁、トマト、昆布佃煮、鶏卵一個。鶏卵は岳彦には禁忌なので、貴重な蛋白源として頂戴する。あと上厠。個室が堂々八個並んでいるので長蛇の列とまではならないで済む。しかしこの膨大な量の排泄物は、結局一の俣谷を浸透下降し、合流して行って、高瀬川、千曲川、信濃川になる…が、考えてもしょうがない。

六時出発。堅固な岩を踏んでの快適な登りで丁度一時間、常念岳の頂上に着く。薄陽がさして岩肌が温かい色をしている。視界は五〇〇米ほどで展望は効かない。山頂らしく小さな木の祠があつて賽銭が供えてある。黄銅の穴あき五円玉が多い。

小憩後、稜線を蝶ヶ岳まで辿る。路の起伏は大したことは無いが次々にピークが現れて、どれが蝶ヶ岳の頂上なのか判然としない。時折雲が切れて槍沢、屏風岩、前穂高の一部が見え隠れするだけで槍穂高の大展望は得られない。のんびり歩いているうちに、十一時二〇分には蝶ヶ岳ヒュッテに着いてしまう。

ヒュッテでは丁度昨夜の泊り客を送り出したあとらしく、真つ黒に日焼けしたアルバイト達が排水溝を掘ったり、石灰を撒いたり整備の最中である。宿泊の受け付けは午後からだというのでヒュッテの前のピークで昼食とする。岳彦はヒュッテに水を買に行く。１リットル一〇〇円也。手近には水場らしいところは無さそうなので、本当に雨水かもしれない。

自家発電のゴトゴトいう音を聞きながら、安曇野を埋めた雲海を見下ろしてゆっくりと乾燥牛飯を噛む。二時頃になって、やっと薄暗い土間で受け付けて貰う。急に客が増え始めたと思ったら皆雨支度である。とうとう降ってきたとなると、今さら下山するわけにもいかない。

ここはカイコダナ方式、それもお詰め合わせ願って二枚の布団に三人寝る割合だという。相容の若い男が頻りにそれをこぼすので、

岳彦が気にして、僕はここでいいですよと空いている上段の板の間に退避してシュラフカバーでねぐらを作る。天候悪化のせいで客は狭いヒュッテに百人以上にもなり雑踏を極める。一番に到着しても、こんなに詰め込まれては処置なし。夕食付一泊四千円は高い。

四時。岳彦がラジオの気象通報を聞きながら、登山手帳の付録の地図に天気図を描く。へええ、いつの間にか勉強しているなど感服した。山岳部の顧問の先生に教わったのだそうだ。

聞くともなく耳に入る会話から察するに、カイコ棚の対岸にたむろする五、六人の中高年。パーティーの一行は名古屋の同業者らしい。「俺がいくらヤブでもそれはやらないよ」などといっている。連中から見せてくれと言われて渡した岳彦の天気図の、お札に振る舞われたウイスキーの一杯が馬鹿にうまい。私は下戸の筈なのに、どうしたことか。

夕食。やたら混雑して貧困、常念小屋より格段に質が落ちる。何を喰ったか思い出せない、そうだ、粉っぽいカレーだった。

食後、カイコ棚に沈んでいたら、外に出ていた岳彦が吹っ飛んで来る。雨が上がって星や山が見えるという。居あわせた宿泊客の全員が色めきたって総立ち、慌てて靴を探して小屋の外に転がり出る。

なるほど北西から西の空一面、燃える様な真紅の夕焼けである。

北鎌尾根から槍ヶ岳、大喰、南、北穂、奥穂、前穂の山稜が堂々と連なっている。山腹のデイテイルはもう暗くなつて見えないが、先ほどまで足元しか見ることの出来なかつた連峰が、幕切れ寸前になつてシルエットになつて勢揃いしている。奥穂小屋の明るい灯がはつきり見える。間もなく夕焼けが色褪せ、早くも頭上に北斗七星が煌めく。

全員思い思いに佇んで言葉もなく、壮大な景観に眺め入つた。

一九八三年八月二十一日

蝶ヶ岳ヒュツテ―徳沢―上高地―松本―鎌倉

窓が白む頃、皆一斉に起き出す。晴れているという声もする。岳彦と二人、急いで外に出る。昨夜シルエットで見た景観が、こんどは朝陽を浴びてまた眼前にある。今度の山行はこれを観に来たんだ、稜線上でもたまたして居た甲斐があつたと、岳彦は大感激。

朝食は頼んでなかつたので、一個三〇〇円のカップ麺というのを買い、土間で湯を沸かして啜る。(注曰、この時、インスタントラー

メンを初めて食ったのではなかったか、少なくとも下界ではそれまでそんなものを喰ったことは無かったような気がする。）

厠の前は三〇人程の行列なので、諦めて六時二〇分出発。

徳沢まで2時間半、展望の効かない湿った針葉樹林の中をひたすら下る。長雨のせいであちこちに泥濘が残り、倒木がそのまま腐っている荒れた路を、逆に登って来るパーティに、四、五回すれ違ふ、いやご苦労、御苦労。

また降り出した雨の中、八時五〇分、徳沢着。座るところも無いので、そのまま上高地まで歩く。岳彦は独りでのんびり歩いて見るといふ。長い下りで足を痛くしたらしいが何もいわない。

雨の半日を上高地で過ごして、鎌倉帰着二十三時。



(平成二八年十一月二二日)